

日本人フランス語学習者の自由会話における *on* の一考察Réflexion sur l'indéfini *on* dans les conversations libres
chez les apprenants japonophones

鈴木 拓真 伊藤 玲子

SUZUKI Takuma ITO Reiko

東京外国語大学博士後期課程 同博士後期課程
Doctoral Program, TUFS

E-mail: suzuki.takuma.r0@tufs.ac.jp

E-mail: ito.reiko.r0@tufs.ac.jp

清宮 貴雅

川口 裕司

SEIMIYA Takamasa KAWAGUCHI Yuji

同博士前期課程 東京外国語大学

Master's Program, TUFS

E-mail: s.takamasa1993@gmail.com

E-mail: ykawa@tufs.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.45 2019, p.71-85.

原稿受理 2019-12-21 ; 最終版 2020-02-22

抄録

母語話者の使用というレベルで不定代名詞 *on* を分析した研究は多く見られるが、学習者が使用する *on* を分析した研究は数が少なく、ましてや日本語母語話者が使用する *on* を対象とした研究は皆無である。本研究では学生インフォーマント 10 名が使用する *on* を用法ごとに分類し、さらにフランス語学習期間・フランス語圏における滞在期間という 2 つの学習者特性との関連性を明らかにすることを試みた。

Résumé

On peut facilement trouver de nombreuses recherches sur le pronom indéfini *on* sur son usage chez les locuteurs natifs francophones. Cependant, il n'existe que peu de recherches sur le pronom *on* employé par les apprenants, et encore moins d'analyses sur l'usage de *on* chez les apprenants japonophones. Dans cet article, nous essaierons de mettre en évidence les rapports entre les emplois de ce pronom et les caractéristiques des apprenants.

キーワード

不定代名詞 *on*, 第二言語習得, 中間言語, 学習者特性

© ふらんぼー Flambeau 45 (2019) pp.71-85.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに*

不定代名詞 *on* は、「人間」を意味する普通名詞 *HOMO* の主格形に端を発するが、Fløttum, Jonasson et Norén (2007) などですでに指摘されているように、現代では不定の対象も定の対象も指示することができ、多様な用法を有していることはよく知られている¹。また、1人称複数の主語代名詞として、現代の話し言葉では *nous* にかわって *on* が多用されている事実はよく知られており、Grevisse (2011) をはじめとした文法書に記載がある。実際、Coveney (2000), Hansen (2013), 鈴木 (2018) をはじめとした先行研究において、とりわけインフォーマルな状況における発話では、1人称複数主語代名詞として *nous* はほとんど用いられず、かわりに不定代名詞 *on* が用いられていることは定量的にも明らかとなっている。その一方、Bradley et al. (2015) はフランス語母語話者の話し言葉における1人称複数主語代名詞としての *on* と *nous* の使用頻度を分析し、前述の先行研究とは異なる結果を示した。調査には「私たちは」が答えとして導き出される質問の含まれるタスク²を用いて、その結果 *on* よりも *nous* の方が積極的に使用されることを明らかにした。ただし、*nous* が多く使用された理由として、自然会話ではなく与えられた架空の状況における発話であったからであると結論付けている。

上述のように不定代名詞 *on* に関する研究ならびに1人称複数主語代名詞に関する研究は多く見られるが、それらはフランス語母語話者の言語使用のレベルにおいてである。外国語教育や第二言語習得の分野においては、1人称複数主語代名詞ならびに不定代名詞 *on* を扱う研究は少ないのが現状である。学習者による *on* の使用を分析した Dewaele (2002) は、32人の中上級レベルのオランダ語母語話者の大学生を対象とし、自然会話と作文における1人称複数主語代名詞の使用について調査した。その結果、1人称複数主語代名詞として使用されうる *on* と *nous* の選択には、学習者の社会言語学的側面との関連性があるとしている。具体的には、積極的に目標言語を使用する学習者らは *nous* よりも *on* を積極的に選択する傾向があった。また、学校での学習期間とフランス語での読書の時間では、後者の方がより *on* の使用頻度に影響を与えているとしている。授業で用いられるような例文だけでなく、読書などを通じて実際に使用されているフランス語と接触することによって、*nous* ではなく、よりフランス語母語話者に近づこうとし、*on* を使用するようになるのだろうと述べている。

以上、本研究と関連する先行研究をいくつか取り上げて述べたが、日本語を母語とする

* 本研究は、科研費 15H03227 基盤研究(B)「A corpus-based multi-level analysis of spoken French produced by pre-advanced Japanese learners of French」と科研費 16H03442 基盤研究(B)「フランス語、ポルトガル語、日本語、トルコ語の対照中間言語分析」の助成を受けた。

¹ 本文の趣旨からは外れるため、不定代名詞 *on* における通時的側面での記述はここでは差し控えることにしたい。通時的側面からは Giacalone Ramat and Sansò (2007) や Suzuki, Nakagawa, Kawanishi and Kawaguchi (2019) などで議論されている。

² 例えば、被験者は「あなた(被験者)とジーナは放課後図書館に行きました。」という状況を与えられた上で、「あなた方は何を学びましたか?」という質問に答えるといったタスクである。フランス語は *pro-drop* 言語ではないため、質問に答える際に「私たちは」という意味を持つ人称代名詞のいずれかが必ず使われる。

フランス語学習者を対象とした研究は管見の限りでは見当たらない。そのため本研究では日本語を母語とする日本人フランス語学習者が使用する *on* の分析を試みることを目的とし、以下の研究設問を設定し分析を進めていく。Q1) 日本人学習者は、フランス語母語話者と同様に、1 人称複数主語代名詞として *on* を使用するか(逆に *nous* を多く使用するかどうか)。Q2) 学習者は自由会話において1 人称複数指示以外のどのような用法で *on* を使用するのだろうか。Q3) 学習者が使用する *on* は、彼らの学習者特性、すなわちフランス語学習期間やフランス語圏滞在期間と関連性があるのか。以上3点について分析する。不定代名詞 *on* はさきに述べた通り様々な用法を持つため、フランス語学習者が使用する *on* を分析することは、学習者が複数ある用法を適切に使用できるようになるための教育的示唆を得る上で意義があると思われる。

2. 研究方法

本節では日本人学習者の *on* を分析するにあたって使用したコーパスについてまず述べた上で、本研究における分析のパラメータとなるインフォーマントの学習者特性そして用法分類について述べていくことにする。

2.1. コーパス

本研究で用いたコーパスは、現代フランス語中間言語音韻論 (*Interphonologie du Français Contemporain : IPFC*) の枠組みで調査した自由会話タスクのデータである。IPFC とは、学習者が第二言語としてのフランス語を習得する際の様々な過程・段階における、音声的・音韻的特徴を理論的に研究するプロジェクトである(近藤・川口 2009)。このうち、本研究の分析の対象としたのは、2016年1月に録音された、2名ペアで行われる10~13分程度の自由会話タスク20録音である。会話の内容はインフォーマントが自由に選択することができるため、ペアによって様々であり、観た映画、訪れたことのある場所、時事的な事柄、子どもの頃の思い出についてである。コーパスの規模は、相槌などのメタ言語的要素を含め約50,000語である。

2.2. インフォーマントおよび学習者特性

本研究ではフランス語を主専攻とするCEFR B2~C1相当のフランス語学習者10名(J1~J10)を対象とする。今回分析に用いる学習者特性は、学習者のフランス語学習期間及びフランス語圏滞在期間の2つである。下の表1は、調査時点でのそれぞれの学習者のフランス語圏滞在期間とフランス語学習期間を、総フランス語学習期間が短い者から順に示し、図1はそれをグラフにしてわかりやすく可視化したものである。本研究においてはフランス語学習期間は「大学入学以前+仏語圏」(大学入学以前にフランス語圏に滞在していた期間)、「大学入学以前+日本」(大学入学以前に日本でフランス語を学習した期間)、「大学」(大学入学後にフランス語を学習した期間)の3つに細かく分けた。この内1つ目の「大学入学以前+仏語圏」は、仏語圏滞在期間ととらえることも可能である。そのため、仏語圏滞在期間(大学在学中)と仏語学習期間(大学入学以前+仏語圏)の2つを合わせてフランス語圏

滞在期間とする。また、インフォーマントがフランス語を専攻としている学習者であることから、仏語圏滞在期間中は、多かれ少なかれフランス語のインプット・アウトプットが明示的、及び暗示的に行われていると考えられる。従って、フランス語圏滞在期間とフランス語学習期間すべてを合わせた、学習者としてフランス語に携わった期間を総フランス語学習期間とした。

表1：学習者のフランス語圏滞在期間とフランス語学習期間³

	J3	J9	J4	J1	J2	J8	J10	J6	J7	J5
フランス語圏滞在期間 (大学在学中)	0.2	0.1	0.8	0.1	0.1	0.1	1.1	0	0	1
仏語学習期間 (大学入学以前+仏語圏)	0	0	0	0	0	2	0	7.4	8.1	0
仏語学習期間 (大学入学以前+日本)	0	0	0	2.6	2	2.1	0	0	0	11
仏語学習期間 (大学)	2.5	3	2.5	2	3	1.8	6.8	0.8	0.8	2.6
総フランス語学習期間	2.7	3.1	3.3	4.7	5.1	6.0	7.9	8.2	8.9	14.6

(註) 総フランス語学習期間が短いインフォーマントから順に左から記している。

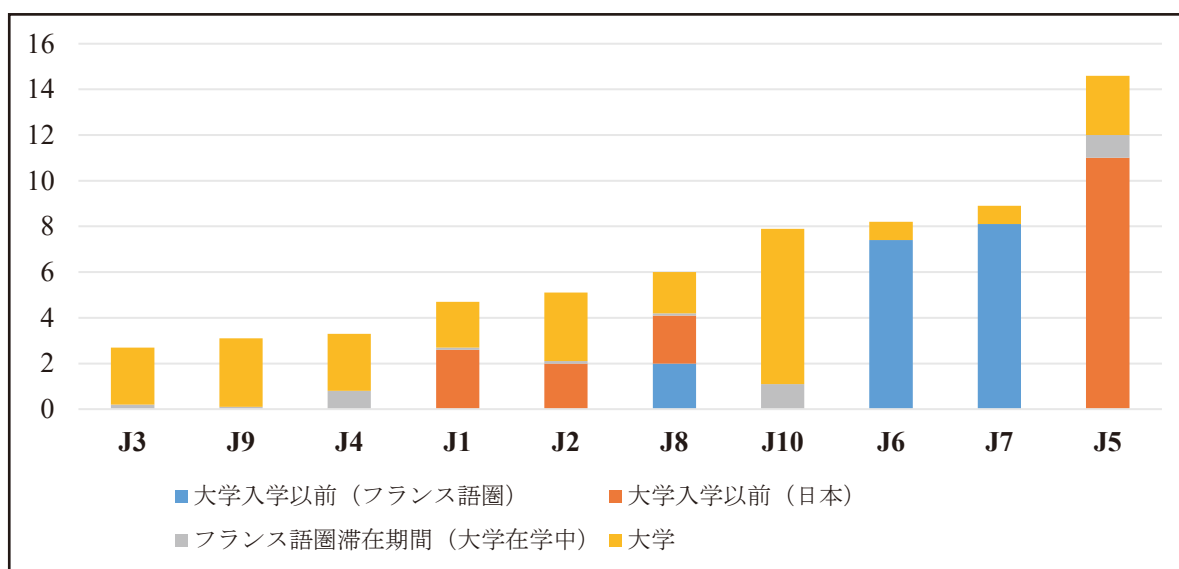


図1：学習者のフランス語圏滞在期間とフランス語学習期間

³ 計算の都合上単位を年で統一した。また小数点第二位を四捨五入している。例えば、J3 は 9 週間 (=63 日間) フランス語圏に滞在していた。1 年が 365 日であることから、 $1:365 = x : 63$ より、 $x=0.172\dots$ 小数点第二位を四捨五入すると 0.2 年となる。

フランス語学習者 10 名の総フランス語学習期間は約 3 年から約 14 年と幅がある。また、フランス語圏滞在期間やフランス語学習期間も学習者によって様々である。

J3, J4, J9, J10 の 4 名は、大学入学後にフランス語の学習を始めた学習者である。一方他の 6 名は大学に入学する以前にフランス語を学習する機会があった者である。そのうち、大学入学以前にフランス語圏に滞在していた経験をもつのは J6, J7, J8 の 3 名である。しかしながら、J6, J7, J8 以外の 7 名についても大学に入学してからフランス語圏に滞在した経験を有するため、本研究における 10 名のインフォーマント全員がフランス語圏に滞在していた経験を有していたことになる。

また、総フランス語学習期間に焦点をあてて各インフォーマントの学習者特性を見てみると、一番短い J3 の 2 年半強から一番長い J5 の 14 年半強と開きがある。このうち、J6 と J7 の 2 名は、総フランス語学習期間がそれぞれ J6 が約 8 年、J7 が約 9 年と比較的長いですが、大学入学以前に長期にわたりフランス語圏の学校で教育を受けた経験のある学習者である。一方、最も総フランス語学習期間が長い J5 は、前述の J6, J7 と異なり、大学入学以前にフランス語圏への滞在経験を有していない。

2.3. on の諸用法

すでに1節で述べたように、不定代名詞 *on* は「人間」を表すラテン語の普通名詞 *HOMO* の主格形を語源とする。そのことから、主語位置でしか用いることができず、人間しか指示することができず、また *on* に後続する動詞はつねに 3 人称単数形に活用させることになっている。このような形態統語論的制約とは反対に意味論的・語用論的側面からみてみると、Fløttum et al. (2007)などがすでに述べているように、*on* は非常に幅広い用法を有しており、不定の人間のみならず定の人間をも指示することができる。簡単に *on* が有する各用法をみてゆこう。

2.3.1. 不定指示

まず、不定指示の *on* についてである。この *on* は「不定総称指示用法」と「不定特定指示用法」の大きく 2 つに分類することができる。前者の例が(1)、後者の例が(2)である(例文中の下線部は筆者によるものである。以下同様)。

(1) Au Québec, on parle français. [不定総称指示]

ケベックでは、人々はフランス語を話す。

(2) On a frappé à la porte. [不定特定指示]

誰かがドアをノックした。

(1)の *on* は、*tout le monde* (みんな)、*tous les hommes* (すべての人々)、*les gens* (人々)などの語句とパラダイムをなすものである。一方、(2)の *on* は具体的に「ドアをノックした」人があるのはわかるが、発話者にとってその動作主が誰だかわからないものである。このような *on* は *quelqu'un* (誰か)などを用いてパラフレーズ可能である。

2.3.2. 定指示

次に定指示の *on* をみてゆこう。こちらも大きく 2 つに分類することができ、それぞれ 1 人称複数を指示する用法と 1 人称複数以外の人称を指示する用法である。前者の例が(3)、後者の例が(4)である。

(3) *On* est allés au cinéma hier soir. [定指示・1 人称複数]

私たちは昨日の晩に映画館へ行った。

(4) *On* ne nous a pas demandé notre avis. [定指示・3 人称複数]

(Hansen, 2013 : 130)

あいつらは私たちに意見をきいてこなかった。

(3)の *on* は発話者とその他映画館と一緒にいった人を指しており、指示対象が限定されている。1 人称複数を指す主語人称代名詞の本来の形態として *nous* があるが、この形は現代ではおもに書き言葉で用いられる一方、母語話者における話し言葉ではほとんど出現せず、*on* が圧倒的に高頻度で用いられている (Coveney 2000 ; Hansen 2013 ; 鈴木 2018)。またチャット内の言語は、書かれてはいるものの、話し言葉に近い特徴を有することが多く、1 人称複数を指す際においても、*nous* よりも *on* の方が使用割合が高い (van Compernelle, 2008)。一方、(4)は上司たちに対して怒りを覚えている被雇用者による発話で、ここで用いられている *on* は上司たち(つまり 3 人称複数)を指している。3 人称複数主語代名詞には *ils* (指示対象がすべて女性であれば *elles*) があるが、どの人称も指しうる *on* をあえて使用することで、軽蔑のような情意的なニュアンスを生み出す現象はすでに多くの先行研究で指摘されている⁴。情意的なニュアンスを生み出すような 1 人称複数以外の人称を定指示する *on* を、Fløttum et al. (2007)は「文体的 *on* (*on stylistique*)」と名付けている⁵。

2.3.3. 本研究における分類

本研究では、日本人学習者が使用する *on* を 2.3.1.節と 2.3.2.節で述べた 4 つの用法に分類して分析を進めることにした。以下 4 つの用法を記しておく。①～②は不定指示の用法、③～④は定指示の用法である。

- ① 不定総称用法
- ② 不定特定用法
- ③ 1 人称複数用法
- ④ 文体的用法(1 人称複数以外の人称を指示する用法)

⁴ 詳細は Fløttum et al. (2007) や土井 (1992) を参照されたい。

⁵ 対して Fløttum et al. (2007) では、1 人称複数を指示する用法は発話文に情意的ニュアンスを帯ないことからニュートラル (*neutre*) であるとしている。

3. 分析

3.1. コーパス内で見られた on

本研究では調査対象の 10 名のインフォーマントから on の用例をのべ 199 例採取した。コーパスから相槌やメタデータを除去した後、2.3.3.節の分類を基にコーパス内の on を指示と用法ごとに分類した。表 2 は各インフォーマントが使用した on の用法ごとの生起数を表している。J2 は自由会話中一度も不定代名詞 on を用いなかったため、以降の分析の対象外とした。また、今回用いたコーパス内では、②不定特定用法および④文体的用法は見られなかった。

表 2 :コーパス内で見られた « on » の指示対象及び用法ごとの生起数

学習者		J2	J4	J8	J7	J3	J1	J9	J10	J5	J6
不定指示	①	0	7	9	1	17	11	14	10	36	13
	②	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
定指示	③	0	1	3	14	1	8	10	17	6	31
	④	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
on の総生起数		0	8	12	15	18	19	24	27	42	44

(註) on の総生起数が少ないインフォーマントから順に左から記している。

また、①～④は 2.3.3.節で示した各用法の番号を表す。

用法①の on が使用されている例を以下に提示する⁶。

(5) [J8 が滞在した経験のあるシンガポールについて話している]

J9 : par exemple il y a euh # plusieurs langues chinois # ah euh malai- malaisien etc
mais euh # pour euh # euh # pour euh communiquer [coup de glotte] # euh
pour communiquer on utilise quelle langue ? anglais ?

J8 : mh mh mh # Euh # oui ! # d'abord anglais

J9 : ah

J8 : mh

J9 : d'accord

J8 : oui # euh on parle bien anglais

J9 : ah

J8 : mh mh mh # les habitants euh singa- singapouriens qui parlent anglais euh it-

⁶ 本研究で使用したコーパスには、エラータグなどのアノテーションも転写とともに掲載されているが、本論文においては煩雑さを解消するべくこれらのアノテーションを除去した。ただし、以下の 2 つは例外として残存させている。(i) #はポーズを表す。(ii) 角括弧[]内に書かれているものは、笑い声や声門破裂音などのメタ言語的要素を表す。なお、使用したコーパスの転写規則により、カンマやピリオドなどの句読点は書かれていないが、疑問符 (?) と感嘆符 (!) についてはコーパスに書かれているものをそのまま掲載している。

euh indien

J9 : indien

J8 : et malaisie

J9 : malaisie

J8 : oui # et chinois

J9 : oui

J8 : mais on parle ensemblement # euh l'anglais

J9 : ah d'accord

(jpto1J8J9_11⁷)

J9 : 例えば, いくつか言語があつて中国語とかマレー語とか. でもコミュニケーションを, [声門破裂音], コミュニケーションをとるには人々ほどの言語を用いるの? 英語?

J8 : そう, まずは英語.

J9 : あー.

J8 : んー.

J9 : なるほど.

J8 : うん. みんな英語を上手に話してるよ.

J9 : あー.

J8 : んー, 英語を話したり, ヒンディー語を話したりするシンガポールの住民は.....

J9 : ヒンディー語.

J8 : あとマレー語.

J9 : マレー語.

J8 : うん. あと中国語.

J9 : うん.

J8 : けどみんな英語で話してるね.

J9 : ああ, なるほど.

(5)において, *on* の使用が 3 例みられるが, それらはすべて用法①の *on* である. とりわけ 3 つ目の *on* に関しては母語話者によれば容認度が低い用例である. というのも, この *on* を発した J8 はその前に *les habitants euh singa- singapouriens qui parlent anglais euh it- euh indien* (英語を話したり, ヒンディー語を話したりするシンガポールの住民) と発話しており, これと *on* が同格だからである. 一般的に *on* は名詞句を照応的に指示することはできないとき

⁷ 本研究で使用したコーパスに与えられた番号である. *jp* は録音対象が日本人母語話者であることを示し, *to1* はインフォーマントの学生が東京外国語大学所属であることを表す. それに続く *J8J9* は J8 が自由会話タスクのテーマを定め, J9 と対話したことを表す. 本来であれば, J8 と J9 の部分はインフォーマントのイニシャルが記されているが, 個人情報保護の観点から本論文においては本論文独自に定めた J1~J10 のインフォーマント名で記すことにする. なお, スラッシュ記号の後の 11 は自由会話 (*conversation libre*) の 1 回目の録音であることを表す. 経年調査を目的とした録音であったことから 2 度目以降の録音コーパスも存在するが, 本研究で使用したコーパスはすべて 1 度目の録音の自由会話である.

れている。興味深いことにこのような *on* の使用は他にも 2 例見受けられたが、これが日本人学習者の特徴であるかどうかは今後さらなる検討が必要だろう。

つづいて用法③の *on* の用例をいくつか挙げておく。

(6) J6 : on a terminé

(jpto1J6J7_11)

J6 : (自由会話タスクが)終わったね。

(7) J6 : alors moi euh bon on est allés au musée du Louvre

(jpto1J6J4_11)

J6 : で、私たちは、あのルーヴル美術館に行ったよ。

(6)は、自由会話の録音が終了するときに発したものであり、この *on* は発話者と対話者を指している。なお、自由会話タスクが始まる時の *on va commencer* (始めようか)、また終わる時の *on va terminer* (終わろうか) のような *on* を用いた発話は他の話者でも多く見られた。つづいて(7)は発話者の J6 がフランスに滞在していた時に訪れた場所について話しているものであり、この *on* は発話者と発話の場に不在である友人を指しており、対話者は指示対象に含まれていない。

なお、主語代名詞として *nous* を用いた例は本研究で使用了コーパスの中ではわずか 2 例しかみられなかった。そのうちの 1 例を以下に挙げておく。

(8) J7 : voilà j'ai fait beaucoup d'amis de de pays différents de Hong-kong de Chine Corée # c-c-cet été euh et on nous avons visité beaucoup de mosque.

(jpto1J7J1_11)

J7 : ほら、私は香港とか中国とか韓国とかいろんな国の友達ができて、この夏は私たちははたくさんのモスクに行ったよ。

(8)の *nous* は発話者と友人を指しており、対話者は指していない。本研究で採取された主語代名詞としての *nous* は対話者が指示対象に含まれない除外の (exclusif) な用法のみであった。また、(8)では一度 *on* と発話したのちに *nous* に修正している点も興味深い。ただし、本研究が使用したコーパスからは主語代名詞の *nous* は 2 例しかみられず、考察内容を一般化することはきわめて困難であることから、これ以上の考察は差し控えることにしたい。

3.2. *on* の指示と学習者特性

学習者 9 名は、自由会話において *on* を用法①と用法③の 2 種類の指示対象で用いていたが、学習者によって 2 つの指示の生起数にバラつきが見られた。各学習者の会話のテーマと *on* の生起数との関連性を調査したが、*on* が現れやすいテーマがあるとは言えなかった。以下では定指示及び不定指示の *on* の生起数と学習者特性の関連性を分析する。

3.1. 節で得た *on* の各指示の生起数から生起割合を求め、学習者特性との間に関連性があるかどうかを考察する。

まず、用法③の生起割合と、学習者特性の1つであるフランス語学習期間の関連性について分析する。図2は、定指示の割合(パーセント表示)⁸を縦軸に、学習期間を年換算した数値を横軸にとり、onを発話した学習者9名をプロットした散布図である⁹。

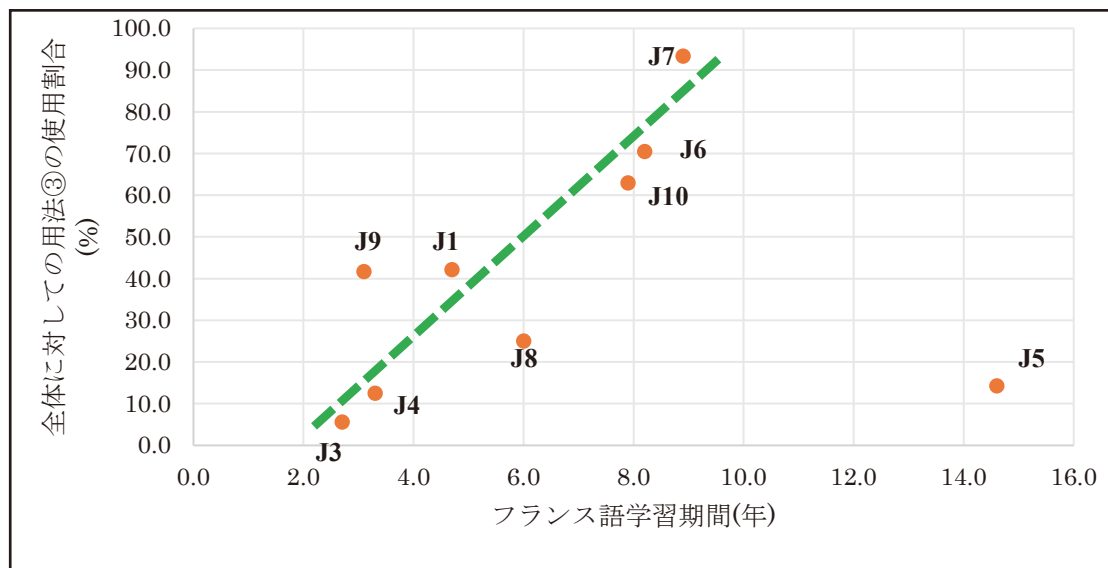


図2: 用法③(1人称複数用法)の割合と学習期間

左下から右上にかけて、J3, J4, J8, J9, J1, J10, J6, J7が分布している。左下に分布するJ3, J4の2名の学習期間は約3~4年間であり、本調査の対象のインフォーマント10名の中では学習期間が比較的短い部類に入る。この3名は用法③の生起割合が低い。この3名の上部にはJ1とJ9がプロットされている。この2名は用法③の生起割合が40%強であり、用法①の生起割合とほぼ同程度となるが、この2名に関しても学習期間は3~4年程度と比較的学習期間が短い。図の右上にプロットされているJ6, J7, J10の3名は学習期間が7~9年程度と比較的長く、用法③の生起割合が高い。以上の8名に関しては、学習期間が長いほどonを定指示として使用する割合が高くなっていることから、学習期間と用法③の生起割合に正の相関関係が見られる。

右下にプロットされたJ5は、先ほどの8名の傾向には当てはまらない。J5は用法③の生起割合が低く、学習期間が長い。2.2.節で見たように、J5は大学入学以前に日本で11年間フランス語を学習し、コーパス作成時点で約14年間の学習歴を有していた。その内の1年間はフランス語圏に留学している(cf. 表2)。日本における学習期間が長く、フランス語圏滞在期間が比較的短いJ5の用法③の生起割合は、フランス語圏での学習期間が長く、フランス語圏滞在期間が長いJ6, J7, J10の3名の用法③の生起割合と大きく異なってい

⁸ 用法③の割合は次のように算出した。“用法③の割合(パーセント) = 各学習者の定指示の生起数 ÷ その学習者の総生起数 × 100”

⁹ 便宜上、指示のうち用法③の生起数を分析に使用する。“用法③のonの生起数 + 用法①のonの生起数 = onの総生起数”であることから、定指示と不定指示には次のような関係がある。「用法③の生起割合が高い」ことは「用法①の生起割合が低い」ことも意味し、「用法③の生起割合が低い」ことは「用法①の生起割合が高い」ことも意味する。

る. J5 の用法③の生起割合は、むしろ、学習期間とフランス語圏滞在期間が短い J3 と J4 の割合に近い。

次に、用法③の生起割合と、もう一つの学習者特性であるフランス語圏滞在期間との関連性を分析する. 図 3 は用法③の割合を縦軸に、滞在期間を月換算した数値を横軸にとり、on を発話した 6 名の学習者をプロットした散布図である。

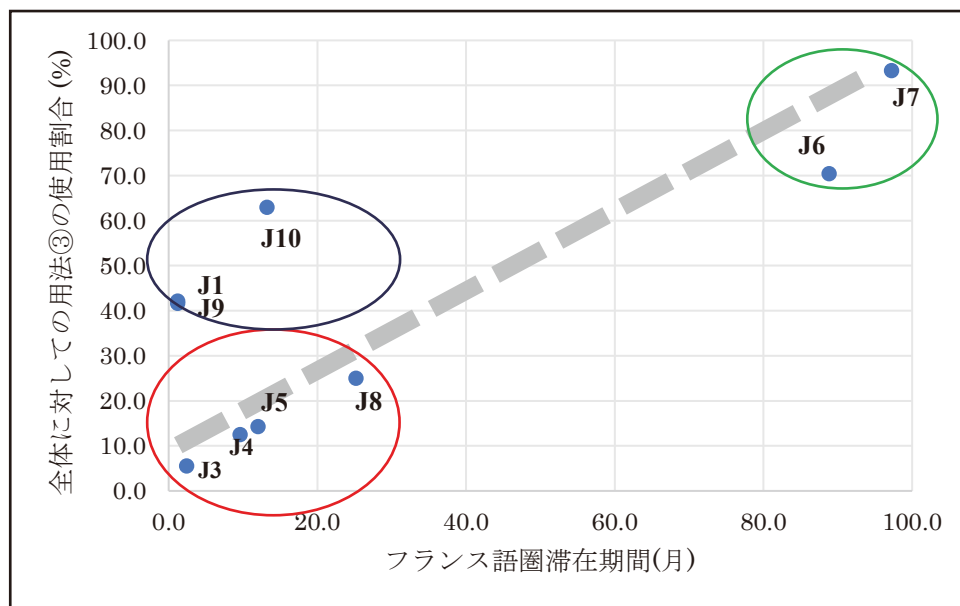


図 3: 用法③の割合とフランス語圏滞在期間

図 3 のように各インフォーマントを 3 つのグループに分類することができる. 赤い枠で囲まれている J3, J4, J5, J8 の 4 名はグラフの左下にまとまって分布しており、フランス語圏滞在期間が 25 か月未満でかつ用法③の使用割合が比較的低いグループに属する. 赤い枠で囲まれたグループの上には、濃紺の枠で囲まれた J1, J9, J10 の 3 名が分布している. これら 3 名はフランス語圏滞在期間が短い、用法③の使用割合が約 40～約 60%と赤い枠のグループよりは高いという特徴をもつ. また、緑の枠で囲まれた J6 と J7 の 2 名は右上に見られる. この 2 名は用法③の on の生起割合が高く、約 7～8 年間のフランス語圏滞在経験がある学習者である.

図 3 から、用法③の使用割合は赤い枠のグループ、濃紺のグループ、緑の枠のグループの順にだんだんと高くなっていることがわかる. 用法③の « on » を用いる割合が高い学習者は、フランス語圏滞在期間が長いことを示している. フランス語圏滞在期間が比較的短い学習者の間では用法③の使用割合にばらつきがみられるものの、フランス語圏滞在期間が長くなると用法③の使用割合はさらに高くなる傾向があるようだ. つまり、フランス語圏への滞在期間が短い学習者には用法③の使用割合が比較的高い者もいるものの、基本的には使用する on の用法とフランス語圏への滞在期間との間には、図 3 の灰色の破線で示したように一定の相関関係がみられそうである. ただし、今回の調査では、フランス語圏滞在期間が中間(20～70 か月)の学習者の定指示の生起割合を得られることは出来なかったため、さらなる調査が必要であることは言うまでもない.

4. 結論と今後の課題

本研究では、日本語を母語とする CEFR B2～C1 レベルに相当するフランス語学習者の自由会話タスクにおいて発話された *on* について、まず *on* の用法を明らかにし、次に用法③の生起割合と学習者特性の関連性を分析した。そして、用法③の指示対象の生起割合と学習者特性との関連性を考察した。まず、1 節で提示した 3 つの研究設問に対する調査結果を述べていく。

Q1) 1 人称複数主語代名詞として日本人学習者は、フランス語母語話者と同様に *on* を使用するか(または *nous* を多く使用するかどうか)。

1 人称複数主語代名詞としての *on* (用法③) は、自由会話中に *on* を使用した 9 名すべての学習者にみられる。その一方、*nous* の使用はわずか 2 例しかみられず、母語話者同様、インフォーマルな状況における会話において日本人学習者は 1 人称複数主語代名詞としては *on* を使用する傾向が強く見られる。つまり用法③の *on* は日本人学習者にとって習得が容易である可能性が示唆される。

Q2) 学習者は自由会話において 1 人称複数指示以外の用法でどのような用法で *on* を使用するのだろうか。

本研究においては不定総称指示の用法(用法①)のみ見られ、この用法の *on* が多く観察された。このことから、用法③と同様に用法①の *on* についても日本人学習者にとって習得が比較的容易である可能性が高い。一方、用法②¹⁰、用法④に関しては全く見られなかった。ただし、これら 2 つの用法が日本人学習者にとって習得が困難であるかどうかについては、本研究のコーパスが小規模であることから結論を出すことは難しいと思われる。そのため、コーパスを拡大して引き続き調査していく必要がある。

Q3) 学習者が使用する *on* は、彼らの学習者特性、すなわちフランス語学習期間やフランス語圏滞在期間と関連性があるのか。

不定代名詞 *on* を使用した 9 名の学習者特性と、*on* の用法との間には一定の相関関係が見られるようである。不定代名詞 *on* の指示と学習者特性との関連性についての分析から、以下の結果が得られた。フランス語学習期間とフランス語圏滞在期間のどちらも短い学習者は、用法③の生起割合が低い。一方で、フランス語学習期間とフランス語圏滞在期間のどちらも長い学習者は、用法③の生起割合が高い。例外的な傾向を示す学習者が存在するが、図4が示すように、用法③の生起割合とフランス語学習期間・フランス語圏滞在期間の間には、正の相関関係が見られた。

¹⁰ 用法②の *on* とパラダイムをなす *quelqu'un* (誰か) の主語位置での使用は本研究が使用したコーパスではみられなかった。

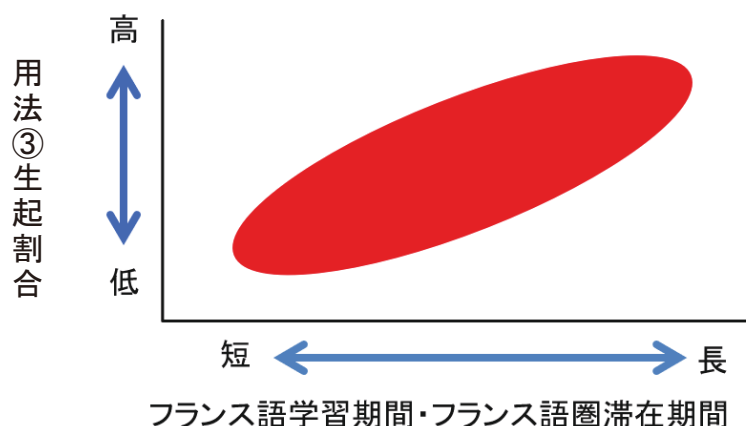


図 4: on の指示と学習者特性との関連性

フランス語学習期間による分析で、J5は他の学習者とは異なる傾向を示した(cf. 図2)が、フランス語圏滞在期間による分析では、他の学習者と同様の傾向を示した(cf. 図3)。このことは、フランス語学習期間よりもフランス語圏滞在期間の方が、onの用法①及び用法③の生起割合の差に関与していることを示唆している。つまり、onの指示は、フランス語学習期間よりも、どのようなフランス語経験を有しているかに関係すると考えられる。本研究のJ6とJ7は、フランス語圏で長期にわたり現地の中学・高校に通い、Dewaele (2002)の言うところの「生きたフランス語との接触」を多く持ったのだと考えられる。その経験によって、J6とJ7のonの使用が他の学習者と異なっていたと考えられる。一方、フランス語学習期間・フランス語圏滞在期間が比較的短い学習者は、フランス語学習期間・フランス語圏滞在期間が長い学習者と比べて、定指示の「私たち」を主語とする発話が少なかった(cf. 表4)。

本研究では Bradley et al.(2015)と同様のタスクによる調査は行っていないが、本研究で使用したコーパスの nous の生起数を調べたところわずか2例であった。すなわち、本研究で用いたコーパスにおいて、定指示の「私たち」の意味では概ね on が使用され、on と nous はほぼ競合していなかったといえる。これは、母語話者による現代フランス語の話し言葉において nous の意味で on が用いられることが多いと述べた Coveney (2000)をはじめとした先行研究の結果と一致している。学習者特性に関わらず、日本人学習者は「私たち」の意味での on の使用が浸透していたことになる。

本研究は、調査した学習者が限定された人数であり、予備調査的な位置づけにとどまる。また日本人学習者による不定代名詞 on の使用に関しては、研究もほぼ皆無であるのが現状で、未解明な部分が多分にある。そのため、コーパスの規模を拡大して、本研究の結果を検証・補完することが必要である。具体的には、本研究で使用したデータから観察されなかった用法②、用法④の使用についての記述や、各用法の on とパラダイムをなす語(句)の使用状況を調査することなどがあげられる。また、フランス語圏滞在期間が20～70か月の学習者についてデータが得られれば、経年的推移の考察が可能となる。

参考文献

欧文

- BLANCHE-BENVENISTE, C. (1985), Coexistence de deux usages de la syntaxe du français parlé, *Actes du XVII^e Congrès international de Linguistique et de Philosophie Romane (Aix-en-Provence, 29 août – 3 septembre 1983)*, vol. 7, Université de Provence, 203-214.
- BLANCHE-BENVENISTE, C. (2003), Le double jeu du pronom ‘on’, Hadermann P., A. Van Slijcke et M. Berré (éds.) *La syntaxe raisonnée. Mélanges de linguistique générale offerts à Anne Bonne à l’occasion de son 60^e anniversaire*, Louvain-la-Neuve : De Boeck Duculot : 43-56.
- BLANCHE-BENVENISTE, C. et C. JEANJEAN (1987), *Le français parlé*, Paris : Didier Erudition.
- BLONDEAU, H. (2002), Real-Time changes in the paradigm of personal pronouns in Montreal French. *Journal of Sociolinguistics*, 5 (4), 453 – 474.
- BOUTET, J. (1986), La référence à la personne en français parlé : le cas de "on". *Langage et société*, n°38, Paris : Éditions de la Maison des sciences de l’homme, 19-49.
- BRADLEY, EVAN D. et al. (2015), Elicitation of french on vs. nous in formal and informal contexts. *Research in Language*, Łódź : The Journal of University of Lodz
- COVENEY, A. (2000). Vestiges of nous and the 1st person plural verb in informal spoken French, *Language Sciences*, 22 (4), 447-481.
- DEWAELE, J.-M.(2002), Using sociostylistic variants in advanced French interlanguage , The case of nous/on*, *EUROSLA Yearbook 2 (2002)*, Amsterdam : John Benjamins Publishing Company, 205-226.
- FLØTTUM, K. et al. (2007), *On : pronom à facettes*, Bruxelles : De Boeck et Larcier.
- GIACALONE RAMAT, A. and A. SANSÒ (2007), The spread and decline of indefinite man-constructions in European languages: An areal perspective, Ramat, P. and E. Roma (eds.), *Europe and the Mediterranean as Linguistic Areas: Convergencies from a historical and typological perspective*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 95-131.
- GRAFSTRÖM, A. (1969), ‘On’ remplaçant ‘nous’ en français, *Revue de linguistique romane* 33, 270-298.
- GREVISSE, M. (2011), *Le bon usage*, 15^e édition par Andre Goosse, Bruxelles : De Boeck-Duculot.
- HANSEN, A.B. (2013), Diaphasic variation and change in French pronouns. Different uses of on with special reference to the on/nous alternation, *Deixis and Pronouns in Romance Languages*, Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins Publishing Company, 125-144.
- LABERGE, S. (1977), *Etude de la variation des pronoms sujets définis et indéfinis dans le Français parlé à Montréal*, University of Montréal.
- SUZUKI, T., R. NAKAGAWA, H. KAWANISHI and Y. KAWAGUCHI (2019), Use of the pronoun on in Old French plays – A case study of *Le jeu de saint Nicolas* and *Le jeu de la feuillée*, *Flambeau* 44, Tokyo University of Foreign Studies, 118-134.
- SYLVAIN, D. et Y. KAWAGUCHI (2008), *Interphonologie du Français Contemporain (IPFC), Récolte automatisée des données et apprenants japonais*, Colloque Phonologie du Français

Contemporain : variation, interfaces, cognition. MSH Paris

van COMPERNOLLE, REMIA. (2008), Nous versus on: Pronouns with first person plural reference in synchronous French chat. *Canadian Journal of Applied Linguistics/ Revue Canadienne de Linguistique Appliquée* 11 (2). 85-110.

和文

近藤野里, 川口裕司 (2009), 「IPFC と中間言語としての現代フランス語研究」, 『ふらんぼー』34, 東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会, 51-67.

鈴木拓真 (2018), 「不定代名詞 on と人称代名詞 nous の人称論的観点からの一比較考察ー口語における nous の代替の on に着目してー」, 『ふらんぼー』43, 東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会, 72-86.

土井隆広 (1992) 「on を用いた情意表現について」, 『人文論究』41-4, 関西学院大学, pp. 118-128.